

まると共に印度の發掘がどしどし進捗して碑銘や刻文の調査が兩の如く報告される、佛教原本の翻譯研究批評は踵を接して出版される、近くは干闥の發掘が續かに終ると、直ぐ高昌の掘り出し物が世人を驚かすといふ風に、重要な事件は暮去朝來連續して起り、殆ど應接に遑なきの觀がある、著者はかくの如く複雑せる歐米に於ける佛教研究の歴史と現状とを撮みて、何處まで佛教に對する調査が歐米に於て進んで居るかを大觀し、その藝術や歴史や地理や教理や聖典に關してどの位重要にして貴重な資料の蒐集が出来、整理が出来たかを事實に基いて概観し、尙且つそれ等批評研究の結果歐米思想上に與へた影響や實際信仰の勢力となつた實狀までも之を叙述し、而して佛教學研究に携はつた代表的學者の學歴や性格を巧みにその間に雜へ讀者にそれ等學者の惡戰苦闘眞摯熱烈の研究的態度を彷彿せしめ吾國民の再思三省奮起躍進を促して居らるゝ、著者赤心の絶叫は全篇に充ち、血涙迸り出づるの概がある、「日本に於ける思想家文藝家として、世界的の貢獻をなさんとするには佛教に關する研究や創作の發表が適切で、且つ有利な捷徑であらう、唯識論でも起信論でも充分に咀嚼し體得して之を近世的に叙述することの出来る腕のある學者」の出現を望むものは當に著者のみではないのである。私は双手を擧げて吾國一般讀書界に本書の一讀を勧め、佛教の世界的研究の氣運をお互に味つて見度いと思ふ。

目次大要、(一)パーリ聖典の研究、(二)梵語佛教聖典の研究、(三)支那佛教の研究、(四)西藏佛教の研究、(五)印度學研究上の佛教(六)西域發掘の佛教、(七)歐米に於ける佛教の感化。東京丙午出版

版社發行、菊版二六〇頁、定價壹圓五十錢。(本田義英)

大乘起信論精義

隅部 慈明著

(附兩譯對照大乘起信論)

「大乘起信論は佛教教々理の眞髓を最も簡潔に最も論理的に記述したる唯一の書である、言はゞ佛教概論ともいふべきもので、」隨つて古來本論の講義は澤山にあるのであるが、「しかし現在これを學ばんとする人にとりて適當な書と言へば甚だ尠い、著者はその缺を補ひ、且つまた著者が著者の見る所をも書いて見度いと思はるゝ所から本書は生れたのである。」

序論に於て著者は本論現出に關して教會史的の意義を畧述し、その著者、譯傳、所依の經典等に就て叙述せられて居るが、併しそれは「古來の説によりて」述べられたものであるから茲に之を取り立てゝ紹介するの必要もなからう、馬鳴と龍樹と起信論との關係に就ても「充分研究の後でなければ確説する譯には行かぬ」と述べられて居るのである、併し著者が從來の説に隨ひ本論の作者を以て馬鳴として居らるゝ態度は疑ふ事が出来ない、「論には」とても言ふべき所に「馬鳴は」として居らるゝのはその一例證である。序論第六章「起信論一部の大意」は著者自らの研究に依り簡明に要領を得た一章であつて著者苦心の痕が見えるのである。

本論に入りては順次論文の一二を擧げ分科分項或は本末の關係を以てし或は問答の體を以てし詳細にして通俗平易なる講義が試みられて居る、而して未だ佛教の専門語に熟達してゐない者のために句釋を附し難澁なる佛教術語解釋の資料に供せられて居る、

講義の内容は「義記」に従はれた所が多く、それを比較的現代の語を以て繰過せられた観がある、到る所「若し信の下の解釋を深く味はずに、前の教理だけを以て直ちに信の對象とするならば、それは全く知解の分齋に止まつて了つて、眞の宗教的信念には遂に到達し得ないことになる」との著者の態度が現はれ、随つて本書は「大乘起信論」の研究的講義と言ふよりも、寧ろ「大乘起信」を講演せられたものだと言ふ方穩當である様に思はれ、佛教一般初學者に之によりて便宜な著述であると思ふ。

別冊講本用「兩譯對照大乘起信論」は本文のみの新舊兩譯對照であつて、「讀者は之によりて何物にも煩はされず自由に本文の意味を思索し理解し」現代的研究に依りて「新らしき意義の上に更により深き眞理の顯彰せられんことを」著者と共に私共は期待するのである。

京都法藏館發行、菊版三六四頁、定價壹圓五十錢、別冊七十三頁定價五十錢、(本田義英)

民本主義の教育

デューイ原著
田制佐重解説

本書はデューイ氏の Democracy and Education を解説したものである。デューイ氏は米國第一流の學者であつて殊に其教育論は内外の思想界に重きをなして居るのであるが、今回其賜暇を利用して東京帝國大學の招聘に應じ數日の中に来朝の筈である。此時に當り先年キング氏の社會教育に關する書を日本の學界に紹介して成功せる新進思想家田制氏の筆によりてデューイ氏の近業「民本主義と教育」が我學界に邦文によりて紹介される、といふことは頗

る時宜に適應するものといふべきである。

本書は解説者の序及緒言を以て初まり原著二十六章が懇切明瞭に解説されてある。蓋しデューイ氏は其實用主義の思想に基き思考を以て統一的经验の不斷の改造不斷の再構成の方便又は機關と見做し、進化的、經驗的、殊に社會的である所に其教育思想の特色を發揮して居るのである。其所謂民本主義も解説者の序文に於て説かれてあるが如く孤立的個人主義の色彩を有せずして社會的民本主義の立場に立つて居る、氏が千八百九十六年より千九百〇三年迄シカゴの教育大學の附屬學校に於て試みたる手工教育もまさに氏の方便的、進化的、經驗的、社會的の實用主義の實踐であつたのである。教育上先驗的な理想主義的な考方は實用主義の思想や其思想の實踐によりて俄かに征服せらるべきものではないけれども殊に其社會的見地の影響に就ては侮ることが出来ないものが存するのである。吾人は氏が「社會と學校」其他の教育書に満足せずして本書に於て更らに一層徹底則ち一層組織的な思想を發表せるを喜び、此を邦文にて本邦に紹介せる田制氏の苦心と勞力に對し感謝せざるを得ないのである。東京、陸文館、定價二圓五十錢(一月廿七日小西重直)

寄贈雜誌

哲學雜誌、丁酉倫理講演集、心理研究、東洋哲學、六合雜誌、東亞之光、無盡燈、六條學報、早稻田文學、學校教育、國民教育、教育學術界、教育界、教育研究、中等教育、教育時論、東京教育、